

2010年度 学部 エコノメトリックス
第26回講義メモ
(訂正版)

2011年1月19日

2

§ 5.6 一般化モーメント法 (GMM)

一般化モーメント法 (GMM: Generalized Method of Moments) には、狭義と広義の二つの捉え方があり、その範囲に違いがある。狭義の GMM は、識別過剰の非線形操作変数法 (nonlinear IV with overidentification) を指すのに対し、広義の GMM は一般化したモーメント法 (generalization of MM (OLS, GLS, NLS, MM just identification / over identification)) を指す。ここでは狭義の GMM について扱うが、非線形回帰モデルの推定はこの授業の範囲外であるので、線形回帰モデルの GMM 推定に限定して説明する。

3

1) 線形回帰モデルの GMM 推定

次のモデルを考えよう。

$$y = X\beta + \epsilon$$

where $E(\epsilon) = 0, \text{Var}(\epsilon) = E(\epsilon\epsilon') = \Omega$

操作変数 W 行列は $n \times l$ とだが、 $n > l \geq k$ であるものとする。 $l > k$ のとき IV は $\underbrace{J}_{l \times k}$ となる。

このとき直交条件は

$$E(J'W'\epsilon) = 0$$

で表されるが、標準モーメントでは

$$\frac{1}{n} J'W'\epsilon = 0$$

4

となるから、これより

$$J'W'(y - X\beta) = 0$$

と書き換えることができる。ゆえに β の MME は

$$b_{MM} = (J'W'X)^{-1} J'W'y$$

$$= \beta + (J'W'X)^{-1} J'W'\epsilon$$

として得られ、漸近分布を考えると、

$$\sqrt{n}(b_{MM} - \beta) = \left(\frac{1}{n} J'W'X\right)^{-1} \frac{1}{\sqrt{n}} J'W'\epsilon$$

$$\text{Var}[\sqrt{n}(b_{MM} - \beta)] = \left(\frac{1}{n} J'W'X\right)^{-1} \frac{1}{n} J'W'\Omega W J \left(\frac{1}{n} J'W'X\right)^{-1}$$

5

J として、 b_{MM} の分散を最小にするものを採用すると、

$$J = \underset{J}{\text{argmin}} \{ \text{Var}[\sqrt{n}(b_{MM} - \beta)] \}$$

$$= (W'\Omega W)^{-1} W'X$$

となり、 $\beta = \beta_0$ (真値)、 $\Omega = \Omega_0$ (真値) 用いて表現すると

$$b_{GMM} = (X'W(W'\Omega_0W)^{-1}W'X)^{-1} X'W(W'\Omega_0W)^{-1}W'y$$

このとき

$$\text{Var}[\sqrt{n}(b_{GMM} - \beta_0)] = \left(\frac{1}{n} X'W(W'\Omega_0W)^{-1}W'X\right)^{-1}$$

となって、効率的な GMM 推定量 (efficient GMM) になる。このように efficient な GMM 推定量を得るためには、 Ω_0 の情報が必要であることがわかる。

6

一般には Ω_0 のかわりに $\hat{\Omega}$ の一致推定量を代入して GMME を得る。

Ω の構造が既知 \rightarrow パラメトリックに推定

Ω の構造が未知 \rightarrow ノンパラメトリックに推定

HCCME, HAC, etc.

Ω を推定するのではなく $W'\Omega W$ を推定するところがポイント。

(1) HCCME (Heteroscedastic consistent covariance matrix estimator)

$$\frac{1}{n} \underbrace{W'}_{l \times n} \underbrace{\Omega}_{n \times n} \underbrace{W}_{n \times l} = \frac{1}{n} \sum_{t=1}^n e_t^2 \underbrace{w_t}_{l \times 1} \underbrace{w_t'}_{1 \times l}$$

ここで、 $e_t = (\epsilon)_t = y_t - \hat{x}_t' b_{GMM}$ である。

7

(2) HAC

$$\frac{1}{n} \mathbf{W}' \boldsymbol{\Omega} \mathbf{W} = \frac{1}{n} \sum_{t=1}^n \sum_{s=1}^n e_t e_s \mathbf{w}_t \mathbf{w}_s'$$

(2)' Hansen-White estimator

$$\frac{1}{n} \mathbf{W}' \boldsymbol{\Omega} \mathbf{W} = \hat{\Gamma}(0) + \sum_{j=1}^p (\hat{\Gamma}(j) + \hat{\Gamma}'(j))$$

これは HAC の変種で、p より離れたところの自己相関は 0 にしたものである。なお、 $\Gamma(j)$ はベクトル自己共分散関数であり、その推定量は

$$\hat{\Gamma}(j) = \frac{1}{n} \sum_{t=j+1}^n e_t e_{t-j} \mathbf{w}_t \mathbf{w}_{t-j}'$$

として得ることができる。

8

2) GMM criterion function とそれに基づく検定

GMM criterion function とは一体何であろうか。efficient GMM の場合、定義は

$$Q(\boldsymbol{\beta}, \mathbf{y}) = (\mathbf{y} - \mathbf{X}\boldsymbol{\beta})' \mathbf{W} (\mathbf{W}' \boldsymbol{\Omega}_0 \mathbf{W})^{-1} \mathbf{W}' (\mathbf{y} - \mathbf{X}\boldsymbol{\beta}) \quad (5.6.1)$$

で与えられる。ここで

直交条件 $E(\mathbf{w}_t \epsilon_t) = \mathbf{0}$
 \Downarrow
 $E(\mathbf{W}' \boldsymbol{\epsilon}) = E(\mathbf{W}' (\mathbf{y} - \mathbf{X}\boldsymbol{\beta})) = \mathbf{0}$

となるが、識別過剰のとき

$$\mathbf{W}' (\mathbf{y} - \mathbf{X}\boldsymbol{\beta}) = \mathbf{0}$$

9

となる $\boldsymbol{\beta}$ は unique に存在するのだろうか。
 答えを先回りすると存在しない。すなわち、

$$\mathbf{W}' (\mathbf{y} - \mathbf{X}\boldsymbol{\beta}) \neq \mathbf{0}$$

である。したがって、直交条件との近さ（距離）を二次形式で表現する。その候補として、

(a) $(\mathbf{y} - \mathbf{X}\boldsymbol{\beta})' \mathbf{W} \mathbf{W}' (\mathbf{y} - \mathbf{X}\boldsymbol{\beta})$: l 次元空間における $\underbrace{\mathbf{W}'}_{l \times n} \underbrace{(\mathbf{y} - \mathbf{X}\boldsymbol{\beta})}_{n \times 1}$ のノルムの 2 乗

(b) $(\mathbf{y} - \mathbf{X}\boldsymbol{\beta})' \mathbf{W} \mathbf{A}^{-1} \mathbf{W}' (\mathbf{y} - \mathbf{X}\boldsymbol{\beta})$: \mathbf{A}^{-1} を使った二次形式、すなわち、ウエイト \mathbf{A} （どの軸に対してウエイトを大きくするか）で重み付けた“距離”

10

などが考えられる。

$\mathbf{W}' \boldsymbol{\epsilon}$ の原点からの近さ（距離）のウエイトを考える際、 $\mathbf{W}' \boldsymbol{\epsilon}$ の分散共分散行列は一つの基準となる。

$$\text{Var}(\mathbf{W}' \boldsymbol{\epsilon}) = E(\mathbf{W}' \boldsymbol{\epsilon} \boldsymbol{\epsilon}' \mathbf{W}) = \mathbf{W}' \boldsymbol{\Omega} \mathbf{W}$$

であるから、(5.6.1) 式の criterion function は、分散共分散行列で距離を基準化してことになる。

ところで、 $\boldsymbol{\beta} = \boldsymbol{\beta}_0$ のとき

$$E(\mathbf{W}' \boldsymbol{\epsilon}) = \mathbf{0}$$

であるから、 $\boldsymbol{\epsilon} \sim N(\mathbf{0}, \boldsymbol{\Omega}_0)$ のとき

$$Q(\boldsymbol{\beta}_0, \mathbf{y}) \sim \chi^2(l)$$

11

が成立する。そこでこの関係を用いれば、過剰識別の検定が構成できる。

$$Q(\mathbf{b}_{GMM}, \mathbf{y}) = \mathbf{e}' \mathbf{W} (\mathbf{W}' \hat{\boldsymbol{\Omega}} \mathbf{W})^{-1} \mathbf{W}' \mathbf{e}$$

を考えると、

$$Q(\mathbf{b}_{GMM}, \mathbf{y}) \xrightarrow{d} \chi^2(l - k) \quad \text{under } H_0$$

となる。